

エンカウンター (ENCOUNTER)

第 137 号

平成25年9月20日

編集・発行人 〒224-0015 横浜市都筑区牛久保西 2-14-28 山口周三

電話 080-1232-0905

<http://encounter.agape.gr.jp/>

小西芳之助「ローマ人への手紙 講解説教」より (16)

第58講 パウロの友人録

フィベ

16章1, 2節「ケンクレヤにある教会の執事、わたしたちの姉妹フィベをあなたがたに紹介する。どうか、聖徒たるにふさわしく、主にあって彼女を迎え、そして、彼女があなたがたにしてもらいたいことがあれば、何事でも、助けてあげて欲しい。彼女は多くの人の援助者であり、またわたし自身の援助者でもあった」。パウロは、15章の終わりで、「主の恵みが共にあるように」と言って話を終えましたが、次に、この手紙を託す人を紹介する必要がありました。パウロはこの手紙を最初にフィベという女性に託しました。私は、このパウロの不滅の手紙を、か弱い女性に持たせ、途中で何か事故にでも遭って、この手紙が紛失するようなことがあったらどうなっていた

かと思えます。フィベは、パウロが病気になった時、ケンクレヤの港で看病した女性であるという学者もおります。私はこの女執事がパウロの手紙をローマに届けた功績について、軽く見るべきではないと思う。フィベのお陰で、我々は、今日このロマ書を読むことができるのであります。我々の手に来る^{わざ}業は問いません。真剣にやる必要のあることを、このフィベからも学ぶことができます。パウロは30年間異邦を伝道しました。この伝道の仕事と、我々の手にくる業の人類に対する貢献は同じであると思えます。パウロ自身、手にくる業をなしたに過ぎないと思っていたに相違ありません。

(P. 438)

アクラ、プリスキラ

16章3節、「キリスト・イエスにある私の同労者プリスカとアクラ
とに、よろしく言ってほしい」。プリスカとアクラは夫婦です。プリ
スカ、奥さんの名前が先に出ています。

4-5節「彼らは、わたしのいのちを救うために、自分の首をさえ差
し出してくれたのである。彼らに対しては、わたしだけではなく、
異邦人のすべての教会も感謝している。また、彼らの家の教会にも
よろしく。わたしの愛するエパネトに、よろしく言ってほしい。彼
は、キリストにささげられたアジアの初穂である。」ここに出てくる

「家の教会」とは、アクラの家であったと思われます。紀元3世紀
末頃までは、信者の集会は自分の家でやっていました。私は、この
高円寺東教会が、パウロの初代教会に似たものであるよう願ってい
ます。私が死んだ後は、諸君も自分の家で、2, 3人集まって、家庭
集会を持たれるようお勧めします。

「わたしの愛するエパネトに、よろしく……」から15節までに、
多くの名前が出てきます。これらの方々は、ローマ教会に集まって
いるパウロの友人たちです。 (P. 439)

信仰の友人

私は、この人生で、信仰における友人を持つ以上の幸福はないと確信いたします。私の75年の生涯は、そのことを証明しています。諸君、信仰の友人を持つことは、自分にも信仰が与えられていることを意味します。自分に信仰が与えられていなければ、信仰の友人はできません。自分に信仰が与えられて、信仰の友を得るのであります。私は、プリスカとアクラの二人のように、本当にパウロのために生命をささげて、パウロを助け励ます夫婦の生活は、地上において最も恵まれた夫婦生活だと思えます。パウロは、このプリスカとアクラの二人の友を得て、彼の人生はさぞかし幸福であったであろうと想像します。内村先生は、「人生は数人の友があれば足る」と言われました。諸君！ 信仰を与えられ、そして信仰の友を得てください。人生の幸福、これに勝るものはありません。私は、私から福音を聴いて信じている数人の友人を持っています。私はこれだけで満ち溢れています。人生で他に欲しいものはもう何也没有ません。満足です。パウロも27人の名をあげ、「よろしく」と言う時、彼もこの喜びに満ちあふれていたと思えます。 (P. 439)

27名の友人

パウロのロマ書は、この27人の友人との出会いによって生まれました。友人とパウロの愛の交流がロマ書を生んだ。ロマ書ができたのは、この27名のお陰であります。そして、この27名のうち、3分の1が女性であった。そして、最初に出てくる女性が、パウロの手紙を託されたフィベでありました。第2番目はアクラの妻、プリスカであります。当時は男尊女卑の時代ですが、主の御前においては男女同権であるということがよく分かります。パウロは女の頭は男であると言っておりますが、同じコリント前書においては「主の前において男は女によっているし、女は男によっている」（11章11節）と述べています。……

信仰の分かった27名の者たちが集まる、これは驚くべき勢力です。我々もまた、このように生き生きとした初代の「家の教会」に還らなければならないと思う。現代の教会において、尊敬すべき先生方がおられることも事実ですが、もう一度「家の教会」に立ち還る必要があることを痛感します。そうでなければ、本当の基督教の生命が伝わらないのではないかと思います。 (P. 440)

家の教会

諸君、どうぞこの教会でパウロの福音を学び、信仰が分かったならば、自分の家で集会を持って頂きたい。私が死んだ後、諸君の中から自分の家で集会を持つ人が出てくることを信じています。福音を本当に分かった人が数人集まったら、聖書を学ぼうという気になってくる。教会の制度などがあつたら、かえって邪魔になるのでないかと思います。

福音は、それを分かった人から伝わります。分からない人は、福音を述べ伝えることができない。私が福音を宣べ伝えるのは、私が内村先生からそれを聴いたからであります。大正10年5月15日、「福音とは、我々の行ないによらず、我々の信仰によらず、ひとえにイエス・キリストの贖いによって、永遠の生命を頂く」、これを内村鑑三から聴き、福音が分かりました。 (P. 441)

天国から高円寺東教会にあてたパウロの手紙

この東京も、パウロの伝道区域であります。きっとパウロは、今も天国から高円寺東教会に手紙を書きたいと願っていると思います。その内容は、ロマ書と同じ文章に違いない。その手紙の最後には、石館夫妻に宜しく、金子君、長野君に宜しく、小西牧師に宜しく等々の文字が書かれていると思います。……

福音というものは人類の知恵を絶しており、人間の考えでは分からない。いつも言う通り、真理を理解する方法には二通りあります。一つは数学的方法で、2と2を足したら4となる。これは理解して知ることです。もうひとつは信仰的方法です。外国語の勉強法です。分からないけれども、信じることにより知る方法です。信じるのが先であります。外国語は自国語では分かりません。これが本当だと信じる。そして知る。この信仰という能力を、近代人は失いつつあります。そのため、キリスト教の深い真理が分からない。キリスト教の真理のみならず、自分の能力では知ることのできない高い真理を、自分のものとすることができない。諸君！ この福音の信仰が少しでも分かって、そして信仰の友人を得ようではありませんか。

(P. 441)

第59講 終結・頌栄の辞

ロマ書全体の要約

本日は、いよいよロマ書の最終の数節に入ります。

25, 26節「願わくは、わたしの福音とイエス・キリストの宣教とにより、かつ、長き世々にわたって、隠されていたが、今やあらわされ、預言の書をとおして、永遠の神の命令に従い、信仰の従順に至らせるために、もろもろの国人に告げ知らされた奥義の啓示によって、あなたがたを力づけることのできる方、すなわち、唯一の知恵深き神に、イエス・キリストにより、栄光が永遠より永遠にあるように、アァメン」。これが最後の文字であります。原語で50余字から成っております。実にこれはロマ書全体を巧みに要約していると、学者が驚嘆している文字であります。……

50余字よりなっているこの文章は、ワンセンテンス（1文）であります。 (P.444)

イエス・キリストの宣教

「イエス・キリストの宣教とにより」。パウロの福音を他の言葉で言えば、イエス・キリストの宣教です。「イエス・キリストの」の「の」という所有格は、ここでは目的格です。すなわち、イエス・キリストを宣教することによって、という意味です。イエス・キリストを宣教するというのは、「イエス・キリストが過去に何をされたか、現在、我々のために何をなしつつあるか、また、将来、我々のために何をなさそうとしておられるのか」を説く事を福音と言う。間違えないで下さい。イエス・キリストは先生ではありません。イエスを大先生と見るのは間違いです。イエス・キリストは救い主であります。我々の手本ではありません。信仰の対象です。すなわち、奥義の啓示によって、我々を救って下さる力を持っておられる方です。イエス・キリストの宣教とは、奥義の啓示を宣教することにあります。この奥義の啓示とは、前述したロマ書3章23, 24節です。我々の信仰、行ない、心の状態によらない。ひとえにイエス・キリストの贖いによって、我々は、死ぬまで「常に義とされつつ」（現在分詞）往く、これが奥義の啓示ということの説明であります。 (P. 446)

信仰の従順

「信仰の従順に至らせるために、もろもろの国人に告げ知らされた」。信仰の従順、信仰に至る従順。……私は、ここが本日の山と見ます。……「従順」という字に山があると見ます。福音を本当として受けること、問題は受けるか受けないかにかかっています。

「唯一の知恵深き神に」。……信仰は知恵です。「神の知恵」であります。我々の知恵を超越しています。復活の望み、これは神の知恵であります。我々が復活を知る、復活を信じるというのは知恵であります。私は、まさに一文不知の尼入道のように、無智の者であります。私は、法然上人の言葉、「^{あわのすけ}安房之助という一文不知の陰陽師が申す念仏と源空が申す念仏に変わり目なし」という言葉を思い出します。この「アワノスケ」という名前は、どうも「ヨシノスケ」によく似ています。私は、「芳之助という一文不知の伝道師が申す称名と源空が申す称名と変わり目なし」と、法然が言って下さっているような気がする。…真理は、誰にでも真理です。法然上人が信じたら極楽に行けて、我々が信じたら極楽に行けないのであれば、そのようなものは真理ではない。真理であれば、誰が行じても同じ結果が得られるはずであります。(P. 447)

知 恵

「知恵」という字に注意して下さい。深き知恵は、信仰によって自分のものとすることができる。我々が5の知恵で理解する時は、5の範囲でしか理解できません。4次元の真理は、信仰によって初めて自分のものとすることができる。それを本当なりと信じる。ここが山だと思えます。これがキリスト教の五つの霊的真理を理解する鍵であります。……「信じて知る」という別の知り方を、現代の人間は失いつつあります。この能力を使わない。これは、19世紀以来、あまりにも自然科学が発達して唯物主義が盛んになり、この人間の最も深い、信仰という能力を我々が喪失しつつあるためであると思えます。……

現代人は、この「従順」という人間の最も深い能力を、喪失しつつあると私は見えています。そうですから、本当に人類を指導するような偉大な智者が出てこない。人類の宝である深い知恵を自分のものとするできませんから。自分が理解できる範囲のことだけを理解しては、数千年にわたって人類が築いてきた深い知恵を自分のものとすることはできません。イエス・キリストの贖いは、神の深い知恵であります。 (P. 448)

「服従」の一手

最後に、パウロは「イエスキリストにより、栄光が永遠より永遠にあるように」と言って結んでおります。

イエス・キリストが贖い主であり、神がイエス・キリストを通して、イエス・キリストを道具として、救いの業を完成せしめた。これが、イエス・キリストの贖いです。そうですから、この「イエス・キリストにより」神に栄光があるように、であります。そして、イエス・キリストにより、「永遠より永遠に」であります。私の信仰によるにあらず、私の行為によるにあらず、私の心の状態によるにあらず、ひとえにイエス・キリストの贖いによって、永遠の生命を頂く、これを「福音」という。

以上で、ローマ人への大書簡は終わりました。

多くの学者は、この終結の一文こそ、ロマ書全体の要約であると言っております。今申し上げた通り、信仰は知恵であります。そして、その信仰の知恵を自分のものとするのは「服従」の一手です。この福音を本当とする一手です。

nachdenken (跡をたどる)

「パウロの前にパウロなく、パウロの後にパウロはない」。また、そのパウロが書きました「ロマ書」の前にロマ書なく、ロマ書の後にロマ書はない」と私は信じます。アルトハウス先生は「このパウロの文字、ロマ書の真理というのは、神のはかり知れない深き知恵から出て来た思想であるが、我々人類はこれを学び、nachdenken する (跡をたどる) に過ぎない」と言われました。我々にも聖霊が降って、このロマ書に説かれた救いの深い真理が、我々の生涯を通じて、心に、少しでも信知することができるよう、切に祈ります。

(P. 451)